

研究開発投資と企業価値 - コスト・ベネフィット分析の視点から -

西村優子（東洋大学）

1. 報告の目的

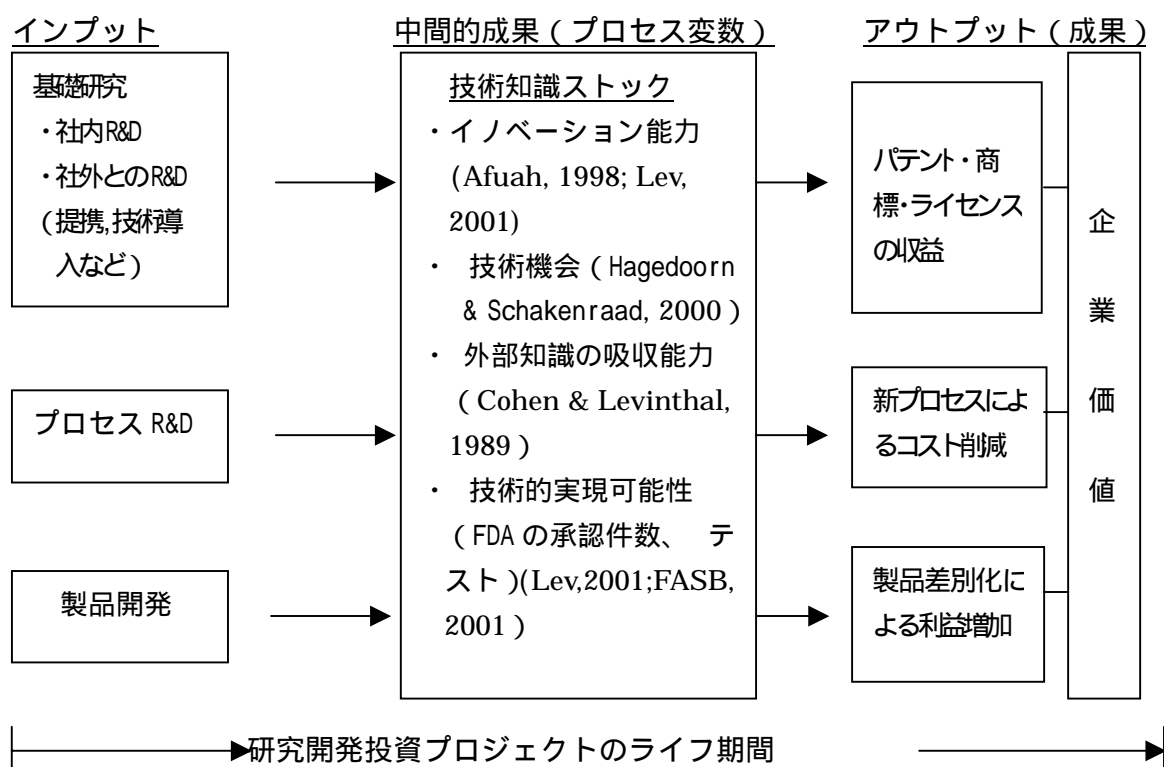
経済のグローバル化による競争激化によって、企業の研究開発投資の戦略上の重要性は従来以上に高まっている。研究開発投資は本質的に戦略的投資であり、経営管理者の意思決定によって決定されるため、研究開発投資の予算管理を行うと共に、研究開発投資プロジェクト毎に、ライフ期間中の研究開発資源投入額とその成果を対比したコスト・ベネフィット分析を行って、研究開発投資が十分な成果を生み出すか否かについて研究開発効率の測定を行う。研究開発投資の効率の測定は、研究開発投資プロジェクトの立案と代替案の評価・採択の段階、プロジェクトの進行途中の段階、ならびに投資プロジェクトの完了時に実施され、管理会計における戦略策定と実行、業績評価における大きな課題でもある。

研究開発投資は、研究開発資源投入 から得られる中間的成果（技術知識ストック） から最終的成果（売上高増、特許料収入、コスト低減、企業価値）の創出に至る一連のイノベーション・チェーンを成している。研究開発投資が技術知識を産み出し、技術知識として蓄積し、最終的な研究開発成果である企業価値の増大として結実するまでには、かなりの長い期間を要し、研究開発投資の各段階でのリスクも異なる。技術知識ストックは、企業における将来の競争優位期間の EVA の現在価値合計で測定される企業価値のドライバーであり、研究開発投資の進捗を測定するサロゲートとして、企業の戦略策定と実行、業績評価において、その測定をどのように行うかが大きな問題となる。

技術知識ストックはブランドや他の知的資産とともに、バリュードライバーであるとの基本的認識のもとに、IAS38(1998) \ FASB Special Report(2001)あるいはSFASNo.141(2001)でのインタangibleの財務的測度ならびに非財務的測度による評価、ならびに外部報告に関する議論や規定の影響を受けて、最近ではわが国においてもインタangibleに関わる論文が数多くみられる。

本報告においては、研究開発投資のコスト・ベネフィット分析の視点から、まず、研究開発投資 から中間的成果（技術知識ストック） から最終的成果（企業価値）に至る一連のイノベーション・チェーンを検討したのち、戦略策定と実行プロセスにおける技術知識ストックの意義と財務的測度ならびに非財務的測度による測定について考察し、今後の課題を明らかにしていきたい。

図表1 研究開発投資のイノベーション・チェーン



（主要参考文献）

Afuah, A., *Innovation Management: Strategies, Implementation, and Profits*, Oxford University Press, 1998.

FASB, Special Report, *Business and Financial Reporting, Challenges from the New Economy*, FASB, 2001.

FASB, *Statement of Financial Accounting Standard No.141*, 2001.

Lev, B., *Intangibles: Management, Measurement, and Reporting*, Brookings Institution Press, 2001.

Lev, B., *New Accounting for the New Economy*, 2000.

Sullivan, P.H., *Profiting from Intellectual Capital: Extracting Value from Innovation*, John Wiley & Sons, 1998.

伊丹敬之「見えざる資産の競争力」『DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』第26巻第7号,ダイヤモンド社,2001年。

田中隆雄「EVAの理論的基礎および実務における有用性(1)(2)」『会計』,1998年12月号,1999年1月号。

西澤脩『管理会計ビッグバン』中央経済社,2000年。

西村優子『研究開発戦略の会計情報』白桃書房,2001年。

西村優子「研究開発戦略と技術知識ストック」『JICPA ジャーナル』Vol.13、No.11,2001年。